

安定成長の時代

昭和50年代

家電全盛期とパソコン黎明期

秋葉原電気街振興会様資料より抜粋

昭和50年代は、昭和48年に始まる第一次オイルショック、54年の第二次オイルショックと、エネルギー危機を経て、環境問題も含めて、地球の資源が有限であることを強く認識し、低成長へ移行する「節約・省エネルギー」の10年であった。

「不確実性の時代」という言葉が語られ、ロッキード事件での田中元首相の逮捕、長島・王などのスーパースターの引退など、世相的には、低迷した時代であった。

昭和50年代の秋葉原

■完成する街並み

昭和46～47年に、田中角栄首相が唱えた「日本列島改造論」による日本中の開発ブームは、土地の高騰をもたらし、昭和45年以降、秋葉原を始め、日本中の商業集積地は、高騰化した土地の生産性を高めるために、高層ビルを建築し、商業空間の拡大に努めた。

秋葉原でも、昭和47年5月にラジオ会館の残り2/3が完成したのち、続々と高層ビルが立ち並び、ほぼ現在の街並みが50年代前半に完成した。また、「秋葉原」と呼ばれるエリアが膨張しはじめ、日本通運裏から神田寺のあたりに部品商を中心とする小売り・卸し・メーカーが誕生した。

■マイコン・電子部品の誕生

昭和52年に、アメリカで8ビットパソコン・アップルが発売され、インテルの8086など16ビットのマイクロプロセッサが登場すると、昭和54年前後で秋葉原でもコンピュータを扱うお店が増え始めた。トランジスタから、IC、LSIへと変化する中、秋葉原は電子部品の中枢としての顔も持ち始めた。

日本第一号のマイコンショップが、昭和51年ラジオ会館2Fに「NEC BitINN東京」が開かれた。同会館だけでなく、神田川沿いに、真光無線のオールマイコンビル（ニュー千代田ビル）・ロケット本店のマイコン売り場、田中電気の東芝パソコンフロアなど新しいエリアが広がった。

57年にはサトームセンをはじめ1ヶ月に6店舗も開店し、57～58年には、かつては異端児扱いされたマイコンビジネスがようやく認知された。

現在のパソコン・マルチメディアの業界で活躍するビジネスマンの多くが、この時代に秋葉原の各マイコンショップで、キーボードを叩いた記憶があるに違いない。まさに、現在のマルチメディア社会の萌芽が昭和50年代の秋葉原にあった。

■国際化の急進

日本のメーカーの技術力が世界に追い付いた昭和40年代以後、日本の家電製品は世界中で人気が高まった。「Made in Japan」が品質の証の時代となり、日本へ観光・ビジネスで訪れる外国人は、お土産に日本の

家電製品（ラジオ・ウォークマン・ステレオなど）を購入するために秋葉原で買い物するようになった。

もともと、秋葉原はメーカーや販売店の看板や電飾、独特の看板・店頭展示のポップなどで、賑やかな町であったが、外国人向けの告知・看板、あるいは店頭の外国人の店員さんが増えるようになり、ますます無国籍の不思議な空間になっていった。

日本の家電メーカーの世界中での活躍とともに、「AKIHABARA」は世界的にも有名な街になった。



昭和50年代の秋葉原の歩行者天国。左にラジオストアの看板

(「写真集『神田』」NPO法人神田学会出版部より)

秋葉原ラジオストアー の歩み



昭和 50 年新ビル完成を機に当社も組織を抜本的に変更した。各店舗を法人化し完全独立させ、当社はビル賃貸業に特化することである。それと同時に 10 店舗あった店も No. 6 が事業を商社（三誠）として専念する事になり撤退、現在の 9 店舗となった。

取り扱い商品もラジオ部品からオーディオ、アマチュア無線、パソコン部品と目まぐるしく変わっていく。しかし業態は変われども露天商時代から苦楽をともにした創業者同士はその後も親族同様の関係を築いてゆき、二代目、三代目となった今でもその伝統は脈々と受け継がれている。

- | | |
|--------------|--------------------------------------|
| 昭和 50 年 10 月 | 新ビル完成 |
| 昭和 50 年 10 月 | 新ビル落成記念
タカラホテル |
| 昭和 50 年 3 月 | 各店舗を各々法人化し独立
させ当社は不動産賃貸業に
特化する |
| 昭和 52 年 3 月 | 代表取締役役に成田吉成就任 |
| 昭和 55 年 3 月 | 30 周年記念
グランドパレスホテル |
| 昭和 60 年 3 月 | 代表取締役役に黒川豊康就任 |